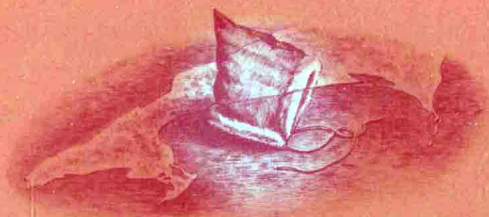


①樺太・千島引揚げ(北海道)編
創価学会婦人平和委員会編



フレップの島遠く

苦難の引揚げ、困苦の戦後
そして故郷の島は異国となった
つる望郷の想いは

北の島をうめつくして咲く

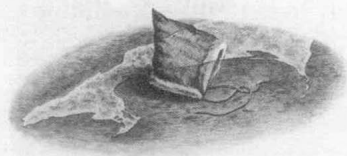
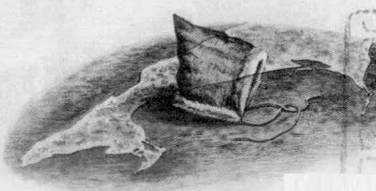
薄紅色のフレップの花に重なって



第三文明社

平和への願いをこめて
⑪ 樺太・千島引揚げ(北海道)編
創価学会婦人平和委員会編

フレップの島遠く



ヘンリー・平和への願いをこめて①
樺太・千島引揚げ(北海道)編
フレックの島遠く

昭和五十九年八月十五日 初版第一刷発行

編者 創価学会婦人平和委員会

発行人 栗生一郎

発行所 第三文明社

東京都千代田区猿樂町二一五十四

電話(一九四)八七三二(代)

振替・東京五一二七八三三

印刷所 図書印刷株式会社

ISBN 4-476-07511-8

* 乱丁落丁本はお取り替えいたします

Printed in Japan

九八四

まえがき

反戦反核が叫ばれる一方、ますます米ソの軍拡競争がエスカレートし、ソ連の中距離核戦力SS20およびバックファイヤー配備に対抗する米国の核弾頭巡航ミサイル「トマホーク」の太平洋配備によって、日本の非核三原則がかつてないほどの危機に立たされています。

こうした中で、創価学会婦人平和委員会の編纂による「平和への願いをこめて」のシリーズも、反響を呼び起こし、このたび第十一巻として、樺太・千島引揚げ（北海道）編『フレップの島遠く』を発刊するはこびとなりました。

本書は、終戦と同時に戦火を浴びた樺太・千島の逃避行、多くの犠牲を生みながらソ連の占領下に置かれた庶民の苦しみ、そして引揚げの労苦を綴ったものです。

この一編一編の手記は、肉親が異邦人となった離散家族の悩み、戦争で犠牲となった夫や子等の眠る故郷へ戻れぬジレンマ、今も残る強制連行による朝鮮人への思いやその妻となった日

本人女性達のこと、さらには島々への望郷の想いが切々と書かれ、故郷を失った人達の胸中にひそむ戦争の爪跡が、いかに深く根強いものであるか、そしてまた、戦争は決して終わっていないということを訴えています。

日本列島の頭部・北海道と旧樺太・千島は、海をはさんで目前にみえる身近な島々です。最北端の街・稚内の丘から宗谷海峡の向こう四十三キロのところに樺太の島影がみえます。その丘に建つ女性の立像「氷雪の門」は、全てを失って引揚げてきた人々の悲しみと慟哭をあらわし、訪れる人々に戦争の空しさと悲惨さを訴えております。

また、最東端の根室市納沙布岬^{のさつぶ}から一・七キロ先には国境が横たわり、歯舞群島^{はほまい}の一つ水晶島は、国境警備隊の基地とおもわれる建物やブルトーザーが見えるほどの至近距離にあるのです。

戦争さえなかったらと、近くて遠くなった島々を前に、引揚げ者の方達は無念の涙をこぼしているのです。

本書の編纂は、あくまでも同島に住んでいた人々の戦中・戦後、そして現在にいたるまでの幅広い戦争体験をもとに、二度とこの過ちを繰り返さないために編纂されたもので、ただいたずらにソ連の脅威を強調するためのものではありません。巷には、反ソ感情を煽るニュースが

流れておりますが、このことには私達も心を痛めるものです。

本書は四つの章、「樺太引揚げの爪跡は……」「悲劇の始まり——突然のソ連軍侵入」「占領下での日々」「引揚げてなお……」に分けられておりますが、中でも、「占領下での日々」には、国境や民族の違いはあっても、戦争を嫌い、平和を願う庶民感情は同一のものであることが、僅かの同居生活の中の貴重な体験として書かれております。

ともあれ、この書を読まれた方が、引揚げ体験を我が子や孫達に語り継いでいただければ幸いと思います。

座談会では、「平和へ」ひとり立つ「こころ」をテーマに、『樺太一九四五年夏』を書かれた、元北海タイムス社会部長の金子俊男氏にご出席いただき、貴重なご意見をいただきました。

また、解説は「望郷四十年——サハリン（旧樺太）の韓国人」と題して聖教新聞社編集委員の大原照久氏に執筆していただきました。

戦争を知らない世代の母達が、生命を脅かすものの芽に対するアンテナを張り、身近な家庭、地域の中から平和構築に向けての勇氣ある行動の人となっていたいただければと、心から願わずにはおられません。

また、巻末には、寄稿して下さった多くの方々に感謝の思いを込めて、全員の氏名を掲載

させていただきました。

最後に、出版にあたり、執筆、編纂に多大なご尽力をいただきました多くの同志の皆様方、および、第三文明社の方々に心よりお礼申し上げます。

昭和五十九年八月十五日

創価学会婦人平和委員会

委員長 浅野香世子

もくじ

まえがき

樺太引揚げの爪跡は……

姉一人、サハリンの空の下に……………菅原茂子 11

混血の我が子と流浪の旅……………匿名 23

教え子と四十四年ぶりの再会……………平沼安子 32

サハリン墓参……………徳橋せつ子 40

悲劇の始まり——突然のソ連軍侵入

戸にかけられた露兵の手……………渡辺芳子 49

樺太での教員生活……………馬場栄子 57

私の体験した真岡八月二十日……………田中む津子 65

地獄の逃避行……………鈴木フジ子 71

沈没船「泰東丸」に乗って……………古里サダ 79

北千島から帰還して……………庄司初代 85

血痕の跡も生々しく……………	藤本照子	91
交換台に散った我が友……………	原君子	98
包帯の下の傷跡……………	千葉操	105
妹の産着はフキの葉だった……………	酒井美千代	114
恐怖の内恵道路……………	熊谷タミ子	124
樺太に眠るわが子よ……………	佐々木ハナ	129
兄の自決と母の死……………	大久保貞子	136
占領下での日々……………		
一人ぼっちの樺太……………	佐々木タミ	147
「ダワイ・ジンシナ・シゲコ」……………	森繁子	158
国後よ、さようなら……………	八木チエ	165
涙でかすんだ国後島……………	森山ミサ	174
九歳でロシア人の子守りに……………	伊藤和子	179
ロシア人の流した涙……………	安保フミ子	184
密航船で北海道かう樺太へ……………	岡本国子	190

だ捕された「おこし船」……………白取キミ 196
引揚げてなお……………

決死の脱出航海……………高野よし子 205

夫を待ち続けた九年間……………岳間沢都 216

脱走兵となって帰ってきた夫……………鈴木トシ 225

苦しかった開墾生活……………和泉ツル 233

択捉島引揚げとあいづく肉親の死……………市川昌子 239

《座談会》 平和へ"ひとり立つ"ころ……………金子俊男／齊藤順子／中島雪 245
藤原正枝／生駒和子

《解説》 望郷四十年——サハリン(旧樺太)の韓国人……………大原照久 271

あとがき

編集後記

寄稿者一覧

》コ ラ ム《

泊居の詩・渡辺みち子 31 / 金さんのこと・山内美和 39 / 青春のお葬式・鈴木英子 56 / 樺太
 唯一の正宗寺院の焼失・柴田三枝子 70 / あの姉妹は、今どうして……・本多万理子 78 / 缶詰
 工場での同僚の死・箱石ヒサ 90 / 「皆さん、さようなら……」・田中みよ 97 / 父の形見・小
 林タイ子 113 / 日本刀の切り傷・和島ハツ 123 / 一本の立て札・北村ウメヨ 135 / 十五歳の青春
 ・熊谷チャ 157 / 一枚のソ連紙・鈴木峰子 164 / 真岡収容所・逢坂キミ 173 / 泥市・加藤静枝 183
 / マンジュウ売りの日本兵・龍瀧恵子 189 / 網の中の人間・三品君子 195 / 引揚げ許可・堀キ
 ヨ 201 / “ジャコウ鹿”・秋山園子 215 / 白い封筒・大塚トメノ 224 / 炭焼き・中山好美 232 / 壁を
 突き破った豚・大和田テルエ 238 / ヘビと同居・樋口キノ 244

表紙・本文イラスト／前田寛
 装幀／高久省三

樺太引揚げの爪跡は……

終戦から三十九年の歳月が流れた。敗戦国日本から経済大国日本といわれるまでに発展し、あの悲惨な戦争が今や忘れ去られようとしている。

しかし、ここに収められた貴重な証言をはじめとして、故郷を追われた人々にとって戦争の傷あとは今も深く残っているのである。肉親がサハリンに残り会うこともままならぬ家族、引揚げけることも出来なかった朝鮮の人々、混血児を抱え苦闘の人生を歩まねばならなかった人、いまだ消息不明の親子など、戦争の重い鎖を引きずりながら生きなければならない運命を背負わされている方々は、まだまだ数多くいるにちがいない。

ここ数年、樺太・千島の引揚げ者の方達による「同郷会」「同窓会」が各地で開かれている。帰るべき故郷を失った人々が、故郷の匂いを求めて集い合い、フレップの花咲く美しい緑の島々のありし日々を思いをはせるのであるうか。

晴れた日、最北の街・稚内の丘から旧樺太が、そして、道東の根室の納沙布岬から北方領土の島々が海の向こうに見える。

稚内は旧樺太からの引揚げ者によって人口が急増し、昭和二十四年に市制になった。稚内市史には「墳墓の地と決めていた樺太に近いこと、或は再び樺太が日本領に戻ったばあい、逸早く渡島でできるような本気で考え、腰を据えた者も多かった」とある。又、根室周辺にも北方領土四島からの引揚げ者の半数以上が定住した。「あの島に少しでも近い所に……」との望郷の念ははかりつくしがたい。

姉一人、サハリンの空の下に

すがわらしげこ
菅原茂子(47歳)
札幌市白石区在住



◇昭和二十三年一家で引揚げの時、姉一人だけ樺太に残り、そのまま十一年間音信不通となる。明けても暮れても姉の帰りを待つ日々が続く。引揚げてから三十年後の五十三年、十五年間の長期にわたる運動がみのり一時帰国できる。肉親と涙の再会となるが、姉は異国の人となって再びサハリンの地へ――。

戦後三十九年、戦争のあの残酷で惨めな思い出を語る人は少なくなり、日本はめざましい高度成長の中で、ともすればあの恐ろしい大量殺人とも思われる戦争の惨事を忘れかけているような今日です。しかし、時代は移り変わろうとも、戦争の傷跡は今もなお残っているのです。

私自身、異国の地となったサハリンにたった一人姉が残り、逢うこともままならないという

運命を背負い生きているのです。

姉は北海道で生まれ、現在外国となったサハリンで暮らし、私は樺太で生まれ、現在北海道で暮らしています。戦争によって生じた、数奇な人生を歩まねばならない姉が可哀想でなりません。私もまた、帰る故郷のない淋しさ……。

思えば二十三年引揚げの時、「ひと船おくれて必ず行くからね」といって手を振ったまま異国の人となってしまった姉。毎日毎日、「今日帰るか、明日帰るか」と待ち続けていた私達。何の音沙汰もなく時間が流れていきました。

姉のことで悲しんでいた母も、そのうち氣をとり戻し姉の写真に「向こうでひもじい思いをしないように」と「陰膳」をして、毎日、姉の無事を祈っておりました。私も母に、「生きていたなら、きっといつかは必ず逢える日がくる」と、なぐさめておりました。

そんな時、母の祈りが通じたのでしょうか。初めて昭和三十四年、十一年振りで「元氣でいる」と、写真を入れた手紙が、子供の頃に住んでいた美深町役場に届いたのでした。懐しい便り、たしかに姉の文字。一度、親や妹弟に逢いたいとのこと。当時、親子のように親しくしていた人の義理があつて残ってしまったとのこと。また、当時、北海道に帰らなくても将来き

と国交が回復して自由に往き来が出来るようになり、必ず皆が樺太に戻ってくるだろうと思つたことなど、一緒に帰らなかつた理由を切々と書いたものでした。

一日として忘れたことのない姉の消息がわかつたのです。姉のその後の手紙にも「なんとしても会いたいのので、一時帰国の手続きをしてほしい」とあり、実家の兄と私で姉の希望する一時帰国の手続きのため、市役所、警察、外語センター、道庁など、ありとあらゆる方面へ働きかけはじめたのです。姉の要請するあちらの役所のいう通りの書類を作つて送るのですが国情の違いか、難しいことを次々と要望して来ました。しかも、敗戦後の混乱の中で「ツウザキ」の姓が「タザキ」の姓に戸籍が誤入されているという思いがけない障害にぶつかつたのです。日本国内でさえ戸籍の訂正は簡単にできないのに、ましてや異国の地でのこと。同一人物を証明する書類を送つてもなかなか認めてくれないのです。

せめて、両親の生きているうちにと願つていたのですが、父は昭和四十五年、娘の顔を見ることなく、八十歳で亡くなつてしまつたのです。

一時帰国のことをなかなかに諦めていたところを運動を始めてから十五年を経て、ある方の骨折りで実現となつたのです。

五十三年二月十五日、横浜港へ私と兄達二人とその家族、そして、道庁からの出迎えの人が

一緒に行ってくれました。ソ連の定期船「ハバロフスク号」のタラップをソ連人に交って降りてくる小柄な婦人は、まぎれもなく三十年前に別れた姉の春子でした。「あつ、ハッコだ、ハッコだ。おーい」と叫ぶ兄。

私も懐しさに胸をふるわせ声をつまらせながらも手に手を振りました。

出迎えに来ていたとは思わなかったでしょう、姉が係員から聞き、驚いた様子で見回していました。互いにかけてつけ涙でぐしゃぐしゃになりながら、ひとまわり小さくなったような姉の身体をしっかりと抱きしめ感激の再会でした。永い永い悲願が膚のふれ合うぬくもりを通して、「この喜びは夢ではないのだ」と実感できたのです。

姉の姿に、私は三十四年前の昭和二十年八月のことが昨日の出来事のように思いだされてくるのでした。

終戦の時、私は八歳の小学校三年生でした。樺太の西海岸、恵須取^{えすとる}から南へ二十四キロの恵須取郡鵜城^{うしろ}村字幌千^{ほろち}に住んでおりました。昭和二十年八月十日頃、ソ連軍の突然の襲撃を受け、数日して恵須取方面をみると夜空が真っ赤に染められ、町中が焼きつくされているようでした。ソ連軍が上陸し沖合いからの激しい艦砲射撃が何日も続きました。

その戦火の中で家族の誰もが心配していたのは当時二十五歳の姉の春子のことでした。恵須